定時制看護学生の看護職に対するイメージと進学動機の関連

The relationship between impression for nursing profession of a part-time nursing school students and reason for going on to nursing school

安藤　宏美・土田　満*

名古屋市医師会看護専門学校
*愛知みずほ大学大学院人間科学研究科

Hiromi ANDOU and Mitsuru TUCHIDA*

Nagoyashi IshiKai Nursing College
**The Graduate Center of Human Sciences, Aichi Mizuho College*

Abstract

A survey on 105 freshmen enrolled in a part-time nursing school in Aichi prefecture was conducted. The impression of nursing profession as a profession is a mere title of "qualified" profession, and it has not led to recognizing the essence of a profession. The impression of "independence", which is a stable livelihood of nursing profession influenced on the reason for going on to nursing school, but the impression for “expertise” which is necessity of expert knowledge, judgement and lifelong education was not. It is suggested that students who have entered a part-time nursing school are at a deficient stage of their authentic career development when they decided to go on to nursing school.

キーワード: 定時制; 専門職イメージ; 進学動機
Key Word：part-time nursing school; impression for nursing profession; reason for go on to nursing school.

Ⅰ．はじめに

2000 年初頭より，わが国において，非正規雇用率の高さや雇用のミスマッチ，若年無業者の存在など学校から社会・職業への移行が円滑に行われていないことが，雇用の問題として挙げられている．それにより職業意識・職業観が未熟なこと，進路意識・目的意識が希薄なまま進学する者の増加など，若者の社会的・職業的自立に向けた課題もみられている．これらの課題は，桝本ら[1)]による看護職を目指す学生において行われた短期大学の看護学生の入学動機の調査でも同様な結果が報告され，また，上妻ら[2)]の看護学生の入学時における学科志望動機の調査でも自己決定せず大学など養成所に入学する者が 30～40%強もいると報告されている．

このような状況に対応すべく，文部科学省により 2004 年 1 月に「児童生徒 1 人 1 人の勤労観・職業観を育てるために」と題した，児童生徒のキャリア発達，キャリア形成支援のために主体的な進路決定や職業人としての自立を目指した指導を行うキャリア教育が提言され，小学校・中学校・高等学校の教育の場においてキャリア教育が進められている．その際には，自ら進路決定できるための職業の知識が必要で，そのためには適切な職業ガイダンスが重要である．なおさら専門職においては，その道のプロとして国家資格を有したり，長期間かけて専門の技術を学ぶ必要があるため適切な職業ガイダンスが必要不可欠である．看護

職も国家資格を有し，高度な知識・技術を要する専門職である．しかし，現状，大学の中途退学率が 7%程度に対し，看護系学校の中途退学率は 14%程度と上回っている．これは，職業選択が適切にできず，入学後専門的な勉強や臨床実習などに直面し挫折してしまうと考えられる．看護職を目指す学生に対しても看護系学校進学前の学校教育においてキャリア教育・職業教育を充実していく必要性が指摘されている．

看護職の認識不足を反映してか，いまだ社会の中では看護職が専門職としての地位を確立できていないのが現実である．専門職とは専門性を必要とする職のことである．現代の日本においては国家資格を必要とする職業を指すことが多いが，専門性には所得，権威，社会的評価，教育訓練・資格制度，組織業務上の自律性の 5 つの要因が挙げられる．柴田 [3]は，社会的評価が低い点には，看護師養成所に 大学・専門学校・准看護学校・高校の衛生看護科等の国家資格の取得に要する年限が異なる種々の課程があり，専門職に相応する高い教育水準を設けずとも，一定の国家資格を取得できる点に課題があると述べている．

1996 年に厚生省は「准看護婦問題調査検討会報告書」において 21 世紀の初頭の早い段階をめどに看護婦養成制度の統合に努めると提言し，看護基礎教育の一元化を掲げていたが未だ実現していない．現状ではどの教育課程を選択するかは，個々の認識に委ねられている．そのため，キャリア教育で看護職を専門職と位置付けたガイダンスが必要であり，それにより若者が看護職を専門職とイメージし，キャリア形成することが望まれる．

キャリア教育による看護職の専門職としてのイメージの変化に関する研究は極めて少なく，キャリア教育が開始される前の 1993 年の先行研究 [4]では，看護課程を志望する高校生は，看護職の持つ尊さや献身性に由来する自負心と資格のもつ現実的利点について良いイメージは持っていたが，専門性を表す高度な知識・判断・技術，生涯教育の必要性の認識は低かった．その中で，短大・大学を志望する高校生は，看護学校・准看護学校志望者に比べ，より生涯教育の必要性をイメージしていたことが報告されている．その後は，キャリア教育開始後の看護職のイメージの変化に関する研究はほとんど見当たらない．

以上の背景を踏まえ，本研究では定時制看護師養成所の学生におけるキャリア形成の現状と課題を明らかにすることを目的として，定時制看護師養成所の看護師課程と准看護師課程における学生の看護職の専門職としてのイメージと進学動機との関連性を検討した．今後，看護職を専門職として認識を高めるためにはキャリア教育でどのような職業ガイダンスが必要なのかひいては看護職の専門性向上につながる基礎資料としたい．

Ⅱ． 方法

1．調査対象者

愛知県内の定時制である A 看護専門学校に在籍する看護学生の 1 年生 105 名（看護師課程 73 名，准看護師課程 32 名）を対象とした．

2．調査方法

調査に先立ち，無記名記述式アンケート内容と調査実施について，A 看護専門学校の代表者に承諾を得た．その後，得られたアンケート結果は個人が特定できないよう統計処理を行うことを依頼文書にし，対象者には口頭と文書で説明してアンケート用紙を配布した．回答は，調査対象者の機密性が保たれるように封筒に入れて回収した．

3．調査期間

令和 1 年 3 月 14 日から 5 月 31 日

4．調査内容

アンケートの質問内容は以下のとおりである．

1）対象者の基本属性

課程，年齢，性別，出身地，入学前の一般学歴，高校の学力レベル，入学前に在籍していた学校における自分の成績

2）入学時の状況

進学希望校とその理由（自由記述），将来の希望職種看護職を希望した時期，看護系学校の受験決定時期

3）看護職のイメージ

看護職のイメージに関する先行研究を参考に，専門性を表すイメージを専門性，公共性，自立性の 3 因子に分類し，各因子 3 項目，計 9 項目を作成した．それらを 5 件法（5 点：非常によく当てはまる　4 点：やや当てはまる　3 点：どちらでもない　2 点：あまり当てはまらない　1 点：全く当てはまらない）の選択式とした．

質問項目以外の看護職に対するイメージを自由記述とした．

4）看護師養成所への進学動機

医療学生の進学動機尺度 [5]を参考にして作成した．24 項目を 5 件法の（5 点：非常によく当てはまる　4 点：やや当てはまる　3 点：どちらでもない　2 点：あまり当てはまらない　1 点：全く当てはまらない）の選択式とした．

A 校に進学した理由を自由記述とした．

5．分析方法

対象者の属性，入学時の状況，看護職のイメージ，進学動機は単純集計し，比率の比較は χ^2 検定を行った．

看護職のイメージ，進学動機の各質問項目の 5 段階回答は点数化し，正規性を確認後，t 検定あるいは Mann－Whitney 検定を行った．進学動機の下位尺度と看護職イメージ，また看護師課程の関連についても，正規性を確認後に同様な方法で行った．

進学動機の因子分析は主因法，プロマックス回転を行い，下位尺度毎に合計したものを尺度得点とした．

統計解析には IBM SPSS statistics ver.27 を使用した．各検定においては危険率 5%以下を有意水準とした．

自由記述については計量テキスト分析を行った．出現回数が多いほど大きな円，共起関係が強い抽出語同士ほど太い線で描画するように設定した．解析には KHCoder(ver.3.00f)を使用した．

6．倫理的配慮

調査対象者には，得られたアンケート結果は，個人が特定できないよう統計処理をすることを口頭と文書で説明し，同意を得て調査を実施した．

本調査は A 学校研究倫理審査委員会の承認を得て実施した．

表 1　対象者の基本属性

人（%）

項目		全体 (n=105)	看護師課程 (n=73)	准看護師課程 (n=32)	有意差
年齢	18歳	57(54.3)	47(64.4)	10(31.3)	
	19歳	20(19.0)	16(21.9)	4(12.5)	**
	20歳以上	28(26.7)	10(13.7)	18(56.3)	
出身地	愛知	61(58.7)	41(56.2)	20(64.5)	n.s.
	愛知以外	43(41.3)	32(43.8)	11(35.5)	
最終学歴	大学	4(3.8)	3(4.1)	1(3.1)	
	高校	98(93.3)	70(95.9)	28(87.5)	－
	中学	3(2.9)	0 (0.0)	3(9.4)	
学科(高校)	普通科	56(53.3)	41(56.2)	15(46.9)	
	商業科	14(13.3)	10(13.7)	4(12.5)	－
	その他	24(22.9)	15(20.5)	9(28.1)	
学力レベル(高校)					
進学校偏差値60以上		4(3.8)	3(4.1)	1(3.1)	
一般校Ａ偏差値45～59		61(58.1)	42(57.5)	19(59.4)	－
一般校Ｂ偏差値44以下		40(38.1)	28(38.4)	12(37.5)	
学業成績	上位	28(26.7)	18(24.7)	10(31.3)	
	中位	60(57.1)	46(63.0)	14(43.8)	n.s.
	下位	17(16.2)	98(12.3)	8(25.0)	
入学時の希望	全日制	38(37.6)	34(46.6)	4(14.3)	**
	定時制	63(62.4)	39(53.4)	24(85.7)	
入学時の希望校					
１種類	看護専門	97(92.4)	68(93.2)	18(56.2)	
２種類	看護専門学校＋大学看護学科	8(7.6)	5(6.8)	3(9.4)	n.s.

n.s.有意差なし，**p＜0.01

Ⅲ．　結果

回答があった 108 名のうち、欠損値等があったものを除外した 105 名を分析対象とした．有効回答率は 97.2%であった．

1．対象者の基本属性

対象者の基本属性を表 1 に示した．

全体でみると，年齢は 18 歳が半数を占め，出身地は愛知県と愛知県以外がそれぞれ半数程度であった．最終学歴は 9 割以上が高校で，大学，中学は極めて少数であった．高校の出身学科は半数が普通科で，次いで商業科，その他に区分した総合科などが続いていた．また，出身高校の学力レベルは偏差値 45～59 の一般校が半数以上を占め，それ以下の偏差値の一般校を加えると 9 割以上の者が偏差値普通からそれ以下の高校出身であった．成績は中位が半数以上で，上位の 26%と合わせて 85%の者が中位以上であった．

基本属性を看護師課程と准看護師課程で比較してみると，各課程と年齢に有意な関連が認められた．年齢は看護師課程では 18 歳が 64%を占めているのに対して准看護師課程は 20 歳以上が 56%を占めていた．

2．入学時の状況について

入学時の状況を表 2 に示した．

全体でみると，入学時の希望教育体制は全日制が 37%に対して定時制が 62%と 3 分の 2 近くを占め看護専門学校のみを希望する者が 9 割以上で，大学などと併願を希望した者は 1 割にも満たなかった．

また，将来の希望職種は 8 割近くが看護師のみを希望し，2 割が看護師と助産師など 2 種類以上の職種を希望していた．看護職に就きたいと思った時期については，中学生以下が 46%，高校生 39%，社会人 14%と中学生以下で決めた者が約半数にも上っていた．実

際に看護系学校の受験を決定した時期については，中学生以下 17%，高校生 63%，社会人 19%と 6 割の者が高校生の時期に決定していた．

表 2　入学時の状況

人(%)

項目		全体 (n=105)	看護師課程 (n=73)	准看護師課程 (n=32)	有意差
入学時の希望校	全日制	38(37.6)	34(46.6)	4(14.3)	**
	定時制	63(62.4)	39(53.4)	24(85.7)	
入学時の希望校					
1種類	看護専門学校	97(92.4)	68(93.2)	18(56.2)	
2種類	看護専門学校＋大学看護学科	8(7.6)	5(6.8)	3(9.4)	n.s.
将来の希望職種					
１種類	看護師	80(76.1)	64(87.6)	16(50.0)	
2種類以上	看護師＋助産師など	25(23.8)	7(0.09)	6(18.7)	－
看護職決定時期					
	中学生以下	48(46.2)	32(44.4)	16(50.0)	
	高校生	39(39.4)	36(50.0)	5(15.6)	**
	社会人	15(14.4)	4(5.6)	11(34.4)	
看護系学校受験決定時期					
	中学生以下	18(17.3)	11(15.1)	7(22.6)	
	高校生	66(63.5)	56(76.7)	10(32.3)	**
	社会人	20(19.2)	6(8.2)	14(45.2)	

n.s.有意差なし，**p＜0.01

看護師課程と准看護師課程で比較してみると，各課程と入学時の希望校，看護職に就きたいと思った時期，看護系学校受験決定時期には，有意な関連が認められた．入学時の希望教育体制は，看護師課程では，全日制と定時制の看護系学校を希望する者がほぼ半数ずつであったのに対し，准看護師課程で85%の者が定時制を希望していた．看護職に就きたいと思った時期は，看護師課程は高校生の時が約半数を占めたのに対して准看護師課程では中学生以下で5割，社会人で3割を占めていた．実際に看護系学校に受験を決定した時期については，看護師課程は約8割が高校生の時に決定したのに対して，准看護師課程では約半数近くの者が社会人の時に受験を決めていた．

進学を希望した理由についての自由記述の頻出語の上位語句(出現回数)は，「働く（26)」「通える（22)」「資格（15)」「取る（15)」「早い（12)」であった．共起ネットワークによる分析により8つの要素が出現し，出現回数が多く，共起関係が強いものは，「働く」と「通える」，そして「資格」と「取る」，「早い」であった．

3．看護職の専門職としてのイメージ

1）全体

看護師課程と准看護師課程を合わせた全体における看護職のイメージを表3に示した．

表3　看護職のイメージ

人(%)

質問項目	選択肢				
	非常によく当てはまる	やや当てはまる	どちらでもない	あまり当てはまらない	全く当てはまらない
専門職である	94（89.5）	8（7.6）	2（1.9）	0	1（1.0）
高度な知識・技術が必要	84（80.0）	19（18.1）	2（1.9）	0	0
生涯学習が必要	74（70.5）	28（26.7）	3（2.9）	0	0
社会的評価が高く誇りが持てる	65（61.9）	26（24.8）	14（13.3）	0	0
将来性がある	83（79.0）	17（16.2）	5（4.8）	0	0
人の役に立つ	88（83.8）	15（14.3）	1（1.0）	1（1.0）	0
給料が良い	48（45.7）	25（23.8）	24（22.9）	8（7.6）	0
一生続けられる	56（53.3）	23（21.9）	20（19.0）	2（1.9）	4（3.8）
女性にとって自立しやすい	62（59.0）	33（31.4）	10（9.5）	0	0

看護師のイメージを表した9つの項目のなかで，非常によく当てはまると回答した割合は「専門職である」「人の役に立つ」「高度な知識・技術が必要」で80%以上と高かったが，その他の項目は70%以下であった．特に「給料がよい」と「一生続けられる」はいずれも50%程度で低かった．

2）各看護師課程との関連

看護職のイメージを表した9つの項目のいずれも平均値が4点台(5点満点)と高かった．また，看護師のイメージのいずれの項目も看護師課程と准看護師課程間には有意な差は認められなかった．

3）看護職のイメージの程度と出身高校の学力レベルの関連

看護職のイメージの程度と出身高校の学力レベルとの関連を表4に示した．

学力レベルは，偏差値45以上の者と偏差値44以下の者に二分した．看護職の9つのイメージの中で，「高度な知識，技術が必要」の項目のみが，出身高校の学力レベル（偏差差値が44以下）の者は90%が高度な知識，技術が必要と考えていが，学力レベルが普通以上の（偏差値が45以上）高校出身の者は73.8%のみに留まっていた．

表4 看護職のイメージの程度と学力レベルとの関連

人(%)

質問項目	選択肢	学力レベル 偏差値44以下	学力レベル 偏差値45～59 偏差値60～	有意差
専門職である	非常によく当てはまる	34（85.0）	60（92.3）	n.s.
	上記以外	6（15.0）	5（ 7.7）	
高度な知識・技術が必要	非常によく当てはまる	36（90.0）	48（73.8）	*
	上記以外	4（10.0）	17（26.2）	
生涯学習が必要	非常によく当てはまる	28（70.0）	46（70.8）	n.s.
	上記以外	12（30.0）	19（29.2）	
社会的評価が高く誇りが持てる	非常によく当てはまる	22（55.0）	43（66.2）	n.s.
	上記以外	18（45.0）	22（33.8）	
将来性がある	非常によく当てはまる	30（75.0）	53（81.5）	n.s.
	上記以外	10（25.0）	12（18.5）	
人の役に立つ	非常によく当てはまる	34（85.0）	54（83.1）	n.s.
	上記以外	6（15.0）	11（16.9）	
給料が良い	非常によく当てはまる	16（40.0）	32（49.2）	n.s.
	上記以外	24（60.0）	33（50.8）	
一生続けられる	非常によく当てはまる	22（55.0）	34（52.3）	n.s.
	上記以外	18（45.0）	31（47.7）	
女性にとって自立しやすい	非常によく当てはまる	25（62.5）	37（56.9）	n.s.
	上記以外	15（37.5）	28（43.1）	

n.s.有意差なし，*p＜ 0.05

4）看護職イメージの自由記述

記述者は37人で，頻出語の上位語句（出現回数）

は「仕事(5)」「ハード(3)」「社会(3)」「取る(15)」「早い(12)」であった．共起ネットワークによる分析により 4 つの要素が出現し，出現回数が多く，共起関係が強いものは，「仕事」と「ハード」で「仕事がハード」，「身体面，精神面でも強い人」のような記述があった．

4．看護職のイメージと進学動機の関連

1）進学動機尺度（全質問項目）と看護師課程との関連

進学動機尺度の質問項目における 5 段階回答を「非常によく当てはまる」を 5 点として点数化し，各看護師課程との関連を検討した．

看護師課程と准看護師課程には，「15．自分の本当の生きかたを見つけたいから」「18．親が望む進路だから」「20．親のすすめがあったから」「22．専門的な知識や技術を身につけたかったから」の 4 質問項目において有意差が認められた．「18．親が望む進路だから」「20．親のすすめがあったから」は看護師課程が准看護師課程より有意に点数が高かったが，「15．自分の本当の生きかたを見つけたいから」「22．専門的な知識や技術を身につけたかったから」は准看護師課程が看護師課程より有意に点数が高かった．

2）進学動機の因子分析

進学動機尺度を主因子法・プロマックス回転により因子分析を行った結果を表 5 に示した．

固有値の推移と解釈の可能性から 5 因子を抽出した．各因子の Cronbach の α 係数は 0.860～0.904 と内部整合性が高かった．累積寄与率は 66.360%であった．

表 5　進学動機の分析結果(主因子法・プロマックス回転)

項目内容	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子
第1因子　無目的・漠然（α＝.901）					
2. ただなんとなく　目に付いたから	0.958	-0.045	0.122	-0.16	0.141
1. ただ，何となく自分に入れそうだと思ったから	0.8	0.119	-0.054	-0.125	0.271
6. 特に目的はないから	0.785	-0.155	0.075	0.082	0.004
4. 現段階では他に何をしてよいか思いつかないから	0.78	0.059	0.037	0.103	-0.109
3. 他にやりたいことがないから	0.764	0.224	0.013	0.016	-0.139
5. なんとなく決めしまったから	0.762	-.051	0.053	0.132	-0.12
第2因子　可能性追求（α＝.873）					
15. 自分の本当の生きかたを見つけたいから	0.05	0.918	-0.228	-0.081	-0.018
13. 自分の能力の限界を試したいから	0.043	0.837	-0.009	-0.054	-0.112
14. 自分の可能性をみつけたいから	0.06	0.792	-0.033	0.058	0.072
16. 人生の視野を広げたいからたから	-0.164	0.689	0.035	0.031	0.039
10. 自分にあった職業をさがすため	0.305	0.583	0.12	0.035	0.072
17. 幅広い教養を身につけたいから	-0.264	0.497	0.265	0.19	0.037
12. 専門職に必要な能力に気づくことが出来たから	0.013	0.416	0.246	-0.12	-0.017
第3因子　適正考慮（α＝.873）					
7. 自分の特性・能力を生かすことができると思ったから	0.07	-0.109	0.969	0.112	0.094
8. 自分の性格や能力が専門職に向いていると考えたから	0.033	-0.029	0.936	-0.036	-0.066
9. 専門職に関連する分野の学習に向いていると思ったから	0.102	-0.047	0.792	-0.092	-0.037
11. 専門職の考え方は自分に合っているから	-0.02	0.212	0.636	0.005	-0.114
第4因子　親の意向（α＝.904）	-0.065				
18. 親が望む進路だから	-0.091	0.054	0.05	0.937	-0.003
20. 親のすすめがあったから	0.073	-0.087	0.014	0.936	0.074
19. 親が行けと言うから	0.362	0.027	-0.057	0.832	-0.011
21. 特に自分の意志ではないから		0.001	-0.268	0.387	0.006
第5因子　専門性重視　（α＝.860）					
23. 専門職に就きたいから	0.179	0.023	-0.076	-0.051	1.034
24. 国家資格，学位，免許状などを取得したいから	0.008	-0.012	-0.016	0.104	0.851
22. 専門的な知識や技術を身につけたかったから	-0.28	0.104	0.224	0.024	0.458

因子相関	第１因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子
第１因子	1	-0.382	-0.391	0.539	-0.481
第2因子		1	0.542	-0.304	0.547
第3因子			1	-0.426	0.5
第4因子				1	-0.403
第5因子					1

第1因子は「2. ただなんとなく，目に付いたから」「1. ただ，何となく自分に入れそうだと思ったから」などの6つの質問項目からなり，『無目的・漠然』と命名した.

第2因子は「15. 自分の本当の生きかたを見つけたいから」「13. 自分の能力の限界を試したいから」などの6つの質問項目からなり,『可能性追求』と命名した

第3因子は「7. 自分の特性・能力を生かすことができると思ったから」「8.自分の性格や能力が専門職に向いていると考えたから」などの4つの質問項目からなり,『適正考慮』と命名した.

第4因子は「18. 親が望む進路だから」「20. 親のすすめがあったから」などの4つの質問項目からなり『親の意向』と命名した.

第5因子は「23. 専門職に就きたいから」「24. 国家資格，学位，免許状などを取得したいから」などの3つの質問項目からなり,『専門性重視』と命名した.

3) 進学動機下位尺度因子と看護師課程の関連

進学動機下位尺度因子と各看護師課程との関連を表6に示した。

進学動機下位尺度因子『親の意向』は看護師課程と准看護師課程との間で有意差が認められた．看護師課程が准看護師課程より有意に点数が高かった.

表6　進学動機下位尺度因子と看護師課程の関連

(M±SD)

	全体	看護師課程	准看護師課程	有意差
無目的・漠然	2.13±1.03	2.21±1.04	1.95±0.99	n.s.
可能性追求	3.34±0.90	3.31±0.88	3.40±0.97	n.s.
適正考慮	2.93±0.95	2.97±0.89	2.84±1.08	n.s.
親の意向	2.47±0.95	2.67±1.20	2.00±1.15	**
専門性重視	4.06±0.97	4.00±0.97	4.19±0.97	n.s.

n. s. 有意差なし，**p＜0.01

5) A校への進学動機の自由記述

A校への進学動機について自由記述を図1に示した．記述者は96人で，頻出語の上位語句（出現回数）は「働く（18)」「看護（17)」「合格（15)」「学べる（7）」「自分（7)」であった．共起ネットワークによる分析により7つの要素が出現し，出現回数が多く，共起関係が強いものは，「働く」と「学べる」，出現回数が多いものは「看護」と「合格」であった.

また看護師課程と准看護師課程とも出現回数が多く，共起関係が強いものは，「働く」と「学べる」だが，看護師課程は，親からの経済的自立を動機とする傾向がみられ，准看護師課程は，家庭状況が動機となる傾向が認められた.

表7　進学動機下位尺度因子と看護職イメージの関連

(M±SD)

	専門性		有意差	公共性		有意差	自立性		有意差
	最良イメージ	それ以外		最良イメージ	それ以外		最良イメージ	それ以外	
無目的・漠然	2.33±0.94	1.99±1.08	*	2.12±1.02	2.15±1.05	n.s.	2.11±1.06	2.18±0.98	n.s.
可能性追求	3.24±0.83	3.41±0.96	n.s.	3.33±0.88	3.35±0.93	n.s.	3.30±0.84	3.43±1.05	n.s.
適正考慮	2.97±0.83	2.90±1.03	n.s.	2.80±0.81	3.03±1.04	n.s.	2.85±0.90	3.12±1.04	n.s.
親の意向	2.70±1.26	2.29±1.17	n.s.	2.55±1.33	2.40±1.13	n.s.	2.39±1.22	2.65±1.22	n.s.
専門性重視	3.85±0.97	4.22±0.95	*	4.01±0.93	4.10±1.01	n.s.	4.04±0.95	4.11±1.04	n.s.

4) 進学動機下位尺度因子と看護職イメージの関連

進学動機下位尺度因子と看護職イメージの関連を表7に示した.

看護職イメージの程度は，各因子の3つの質問項目とも「非常によく当てはまる」と回答した者を『最良イメージ』，それ以外の者を『それ以外』と区分した．進学動機下位尺度因子『無目的・漠然』『専門性重視』が看護職イメージ『専門性』の『最良イメージ』と『それ以外』で有意な関連が認められた．『無目的・漠然』では,『最良イメージ』がより有意に点数が高く，逆に『専門性重視』では,『それ以外』が,『最良イメージ』より有意に点数が高かった.

Ⅳ. 考察

1. 対象者の基本属性について

入学時の年齢は，18 歳が 57%と大学などと比較するとかなり少なく，高校を卒業してすぐに入学している割合は低かった．課程毎を比較すると，看護師課程では 18 歳が 64.4%であるのに対して准看護師課程では 31.3%であり，准看護師課程では高校から直ぐに進学してくる者が少ないことが認められた.

准看護課程の修業年数が2年で，看護師課程の4年に比べて短く，既に社会人である者が，働きながら学ぶ定時制校を選ぶうえで，より短い就業年数を選択していることが推測される.

経済的な面も考慮され，専門実践教育訓練給付金制度やひとり親への自立支援教育訓練給付金制度を利用して，准看護師の資格取得を目的とした入学もあると

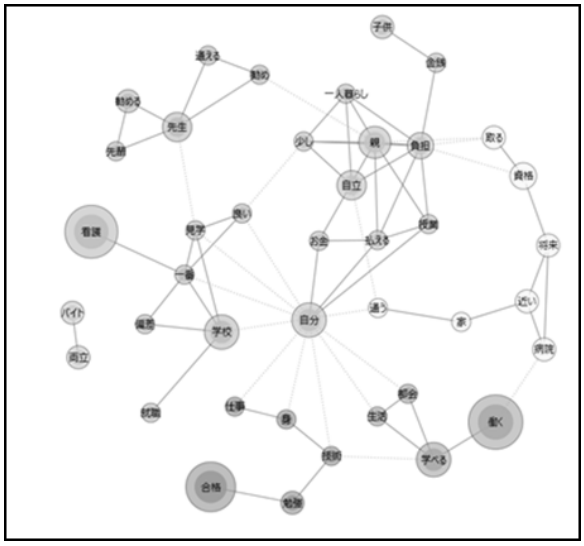

図１　A 校への進学動機の自由記述

考えられる．

出身地については県内が半数以上を占めていた．この背景には，県外からの志望者は，以前は地方の看護師養成所の少なさや病院の少なさによる就職率の低さにより都市の看護師養成所に進学し，就職する傾向にあった．しかし，現在は地方でも看護師養成所，病院等が増え，そこに留まる率が高くなっており，A校では地方で積極的な募集をしなくなったことが関係していると推察される．

学力レベルに関しては，偏差値 45～59 が約半数，偏差値 44 以下が 4 割であることは，一般的に看護専門学校は看護系の大学の偏差値より低いと言われていることと一致していた．学力レベルが将来の職業選択を狭めている可能性が考えられる．

入学前に希望していた教育体制は，看護師課程が全日制と定時制が半数ずつに対し，准看護師課程は 90%近くが定時制であった．看護師課程の学生は，もともとは全日制を希望したが学力レベルが低いため定時制の A 校にしか合格できなかった者がある程度いることが推察される．自由記述でも，看護師課程では「この学校しか合格しなかった.」などの理由が少なからずあった．それに対し准看護師課程は社会人が多く，働きながら通え，かつ短期間で修業できる定時制の准看護師課程を希望する者が多いことが示唆される．

看護職に就きたいと思った時期については中学生以下が半数を占めていた．寺崎[6] がキャリア教育を受けた児童生徒の調査において，職業選択に対する学力という業績主義的選抜のプロセスにおいて，看護師や保育士を志望する者は相対的に学力が低く，生徒は自ら「好きなこと」に忠実に職業を選択するなど，業績主義的選抜のプロセスを踏襲していないことを報告している．A校の学生の学力レベルは中学生以下の低学年から学力が既に低く，「好きな職業に就く」という考えが重きをなして看護系学校受験に至っていることが推察される．看護師課程と准看護師課程の比較では，看護師課程は「好きな職業に就く」という考えが高校生まで続いているのではなく，高校生で青年期のアイデンティティ確立を通過し，看護師になるかを再考していることも考えられる．それは，看護師課程が看護系学校受験決定時期を 80%近く高校生であったと回答としていることからも示唆される．

また，定時制の学校を選ぶ理由としては，やはり進学による親への経済的負担を減らすために仕事と両立でき，自立できる点が大きいことが自由記述から推測される．「看護師は不景気に強い」と言われ，看護師は景気の影響を受けにくく，安定した雇用と給与が保証された仕事と認識されている点や，近年，長く不景気が続く我が国では所得格差により経済的な弱者が生まれていることが結びついていると考える．これらの考えは，学生自身よりは進路を相談する上で親や学校の先生など周りの大人から得ることも多いと考えられる．

2．看護職イメージ

本研究では，対象者の 9 割の者が看護職の専門性に関する「専門職である」「高度な知識・技術が必要」「生涯学習が必要」「将来性がある」「人の役に立つ」「女性にとって自立しやすい」という 6 項目について，やや当てはまる以上の高いイメージを持っていた．

前田ら[7] は看護課程志望高校生の看護職に対するイメージに関する調査において，看護課程の学校を志望する高校生は，人の役に立つという社会的貢献のイメージは高かったが，高度な知識・判断・技術，生涯教育が必要という専門性のイメージは低かった．また，看護学校・准看護学校志望者は短大・大学志望者に比べて，特に生涯教育が必要という認識が低かったことを報告している．この調査結果から約 20 年が経って実施された本研究では，生涯教育が必要という項目を含めて看護職の専門性に関するイメージが全体的に高くなっていた．看護職の専門性に関するイメージが全体的に高くなった背景には，義務教育におけるキャリア教育の成果や世間一般の看護職への認識の変化等が影響し，本研究で対象とした定時制の専門学校でも，継続して主体的に学習する能力の素地を既に獲得している者が多くなってきていることが推察される．

一方，出身高校の偏差値別に看護職の専門性に関するイメージを比較すると，偏差値の低い高校出身者と高い高校出身者では，「生涯学習が必要」では有意差がなかったが，「高度な知識・技術が必要」の項目で

有意な差が認められ，偏差値の低い高校出身者が高い高校出身者より「高度な知識・技術が必要」と考えていた．偏差値の高い高校出身者は低い高校出身者より，寺崎[6]が報告しているように学力が高い者は職業の選択肢が多く，キャリア教育でより多職種の情報を得ることにより，看護職のイメージをそれ程高度な知識・技術が必要とは考えずに，批判的に評価しているとも考えられる．偏差値の低い高校出身者で定時制校に進学する者は，自由記述にあるように，看護職の専門職としてのイメージは「資格がある」程度の単なる専門職と言う肩書だけのイメージで，専門職の本質までの認識には至っていないことが示唆される．

3．看護職イメージと進学動機の関連

進学動機に関する質問において，最も当てはまる割合が高かった項目は国家資格を取得したいことであった．また，進学動機尺度の因子分析により抽出された『無目的・漠然』は，当てはまらないとする者の割合が最も多かった．これは，幼少期から看護師になりたいという内発的動機づけにより，看護師免許取得を目指して入学してくる学生が多いことに関係していることが考えられる．

動機について，本研究の対象者は親の勧めが進学の動機になっている者が 41%と多く，上妻ら[2]による看護学生の入学時における学科志望動機の調査でも他人の勧めが 48.2%であった報告とほぼ同様結果が得られている．キャリア教育が進んでいる現在でも，キャリア形成できていない者が多いことが考えられる．背景には，現代の若者の親への依存の長期化や青年期のモラトリアムの遷延がある[8]ことも推察される．

親の勧めによる入学動機について，看護師課程と准看護師課程を比較すると，看護師課程が准看護師課程より親の意向による入学が有意に多かったことが認められた．看護師課程は高校から社会人を経ずに入学してくる者が 64%いたのに対して，准看護師課程は社会人を経ている者が半数以上を占め，人生を再設計すべく，看護師免許を取得して再就職に向け進学してきている者の多いことが考えられる．

看護職イメージと進学動機との相関については，看護職イメージの下位尺度因子『専門性』と進学動機の下位尺度因子である『専門性重視』に正の相関，『無目的・漠然』に負の相関が認められた．看護職が国家資格の専門職であるイメージが高いと，看護師免許取得の目的意識が高くなり，それが大きな進学動機となっていることが推察される．しかし，専門性のイメージが高い者は，イメージの低い者より，進学動機の『無目的・漠然』が有意に高いことも認められたことから，専門性のイメージが高い者は，自分の専門性に対する能力等の適正が不安になり進学を決めかねている状況も伺える．しかし，進学動機の自由記述からは，親からの経済的自立を動機としている記述が 1/3 を占めていたことから，定時制校への学生の進学動機には，看護職に就くと将来の生計が安定するという経済的な『自立性』のイメージが大きく影響しており，高度な知識や技術，生涯学習が必要とする『専門性』のイメージはあまり影響していないことが考えられる．キャリア教育が進められている現状でも，経済面が優先し，本来あるべき専門性に関するキャリア形成が十分にできていないことが示唆される．

Ⅳ．結論

看護職の専門職としてのイメージは「資格がある」程度の単なる専門職と言う肩書だけのイメージで，専門職の本質までの認識には至っていない．進学動機と看護職イメージの関連については，進学動機には看護職の生計の安定である『自立性』のイメージが影響し，看護職の『専門性』という高度な知識や技術，生涯学習が必要というイメージは影響していなかった．

入学時はキャリア形成が未だ不十分な段階であることが推察されることから，職業人を短期間で養成する看護専門学校に進学する学生・生徒であるゆえに，適切なキャリア形成の上での進学が望まれる．

利益相反

論文に関連し，開示すべき COI（利益相反）関係にある企業等はない．

引用文献

1) 枡本朋子,田邊美津子：看護学生の入学動機と自己教育力との関連，川崎医療短期大学紀，32 号，7-13，(2012)
2) 上妻瑞江,安友 裕子,山中 克己,他：看護学生の入学時における学科志望動機 Nagoya Journal of Nutritional Sciences，第 1 号，(2015)
3) 柴田恵子：イギリスにおける看護尺の専門職化と大学教育―日本への示唆― 大学アドミニストレーション研究,第 6 号，(2015)
4) 前田真紀子 高畑晴美 近藤益子,他：看護課程志望高校生の看護職に対するイメージに関する研究，岡大医短紀要，5，37-45，(1994)
5) 中野良哉,大倉三洋,酒井寿美：医療系専門学校生の進学動機と職業的同一性―理学療法士，作業療法士養成課程の学生を対象に―，高知リハビリテーション学院紀要，第 11 巻 1－15，(2010)
14，(2009)
6) 寺崎里水：「好き」を入口にするキャリア教育の

限界 ― 子どものやりたい「しごと」をめぐって―，年報社会学論集，19 号，101-105，(2006)
7) 前田智香子：専門家の職業的アイデンティティ形成の研究に必要な視点，文学部心理学論集(3)，5-14，(2009)
8) 内閣府政策統括官：若者の包括的な自立支援方策に関する検討会　中間とりまとめ，(2004)